

## 「初めに神は天と地を創造された」

2020年09月18日

初めに神は天と地を創造された。地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。(創世記1章1節～2節)

聖書の冒頭の言葉は、「初めに神は天と地を創造された」である。私は、この言葉に触れた時、衝撃を受けた。神との出会いであった。高校生の時、「青春の嵐」に見舞われ、悶々とする中、救いを求めて、お寺に通い、住職に教えを乞うていた。町の知名氏が集まり、増谷文雄の『仏陀』の読書会などにも参加していた。しかし、どうしても納得がいかなかった。それを見越してか、住職は「君は教会を知っているか」と言われた。町に教会はあることは知っていたが、キリスト教とは無縁の生活であった。住職に押され、初めて教会を訪ね、牧師という人にお会いした。その牧師との出会いが、私の生涯を決定的に変えた。牧師は、「キリスト教を知りたいなら、聖書を読みなさい」と言われ、聖書を貸してくれた。初めて、聖書を読んだが、その冒頭が「初めに神は天と地を創造された」であった。この言葉に衝撃を受けた。私の育った文化では、神々は人間や自然につながる延長線上にあった。しかし、天地を創造した全能の、人間や自然を超越した神の存在記述に驚愕したのである。住職のところに行き、「聖書には『初めに神は天と地を創造された』と書いてあります」と言った。住職は涼しい顔をして、「では、天地を創造した神は誰が造ったのかね、大神様かね、その大神様を造ったのは大々神様かね」と言われた。これを聞いて、私は、仏教とキリスト教の時間に対する考えの違いを知った。仏教は初めがなく、終わりもない。それは循環する時間認識となる。キリスト教は初めがあり、終わりがある、一回限りの直線的な時間と捉えている。住職から聞いた仏教の教えは、世界は無常の真理の法があり、この法に心と身を委ねて生きるところで、「覚者」としての生き方が得られるというのが基本であった。ここには、清々しいまでの救いの境地があるだろう。鴨長明の『方丈記』の冒頭は、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし」で、無常の大河の流れに身を委ねて行きよ、人間は結んで消えるあぶく・泡のような存在であると言う。私は自己受容できず苦しんでいたが、意味のない泡のような存在であることに耐えられなかった。聖書は、初めに神が天地を創造し、終わりまで支配される。ならば、どんなに小さく、弱くとも、神の下で、私の存在が位置づけられる、アイデンティティを確保できると思った。この思いが、キリスト教への求道を、一途にさせた。聖書は、全能の神が存在し、この方が天地を創造し終わりまでを導かれると書き出している。これは、私が私であってよい、歴史には意味があるという宣言である。

神の天地創造は無から有への創造であるが、「地は混沌として、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた」と、混沌とした地が既にあったと記している。創世記は、紀元前6世紀頃、イスラエル人がバビロンに捕囚された時代に書かれている。当時、バビロンは強力な帝国であったが、混沌とし、捕囚の民は苦難を強いられていた。その時、彼らは、自分たちの信じる神は混沌を秩序づける神であると、バビロンに抵抗する信仰告白としたのである。しかも、地は混沌とし、闇が深淵の面にあったが、神の霊が、その上を動いていた。即ち、どんなカオス、闇も、神の霊に包まれ、「よし」と是認される世界である。創世記の冒頭は、混沌と苦難の中で、創造主への高らかな賛美から始まっている。